

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024.11



令和6年11月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第11号 No.798

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二四年 一月号 (通巻七九八号)

◇今月の二十首詠……多賀城

菊地栄子 2

■作品A

磯田ひさ子・市原やよひ他 4

A 秋山裕子他 18

B 芦田房子他 46

C いじちもとこ他 58

A 島根美智子他 70

■オリブ集

箕浦 勤・餅井辰視他 34

◇今月の二人

芳賀町子・中村里美 14

私と短歌との出会い (267)

河上悦子 17

●追悼・ばばりょう「」

ばばりょうこ作品三十首 28

追悼文 もとむらしげと・くずはらりつ・ふじとよひこ

よしとみゆうこ・きゅうとくなおみ

さこだときえ・こなかよしと・桃原佳子

ばばりょうこ先生を送る会・報告

さとうちえこ 33

■〈第一歌集を読む〉20

田村利子歌集「霧の緞帳」

— 自分史のスタート — 横田敏子 40

■鑑賞・三好直太の歌 16 〈卒〉

久我田鶴子 57

■歌壇月旦

長寿、うたの品格

檜垣美保子 42

■遊覧寄港〈私の故郷〉

中江京子 43

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】木村文子 44

■九月号作品批評

A …… 奥田陽子・大浪美雪 62

深井喜久代・さとうちえこ

B …… 酒井 牧・甲田啓子

C …… 上林節江

オリブ集 …… 永田進一

今月の二人・作品評

久我田鶴子 16

最近の歌誌より

【編集部】 80

クリップ …… 82

神田通信 …… 表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

多賀城

菊地 栄子

えごの花揺るる広場の歌碑により忠雄先生の短歌写しゆく

一斉に茅花の穂先色かわる風は魔術師思いのままに

観るべきは何もあらずと去りゆきし 多賀城南門復元ま近

千年前の面影たどり感涙の芭蕉を呼び出す壺の碑つぼ いしがみ

レプリカでかまわないとも言い交わす国宝指定の壺の碑

いち早く花を咲かせて深みゆく政庁跡の水木の木立

陸奥按察使鎮守将軍家持の短歌なき名のみ残る多賀城

ふた本の松が重なる遠景色曰くありげにいにしえが見ゆいわ

昭和十七年生まれ
昭和四十四年地中海入社
歌集に「賢道」他三冊がある

樹の下に寄りそう石碑、供養塔古人ひそと眠れるものか
 色、木目、大小異なる木簡よ我等の先祖はいずこにおわす
 振花の紅き小花の初々しさおちこち見おれば人の寄りくる
 あやめ祭り果てたる苑の返り花飛び立つ群れは椋鳥らしも
 胸を突く貧窮問答歌 白穂となる茅花の擗しと作りてみたし

平安初期桓武天皇の時代らし焼けた瓦は反乱に会う

陸奥国府軍事活動を記したる木簡見事に見逃し来たり

平らかな岡は国司等の邸宅跡刈り込まれたる干し草匂う

歌枕尋ね来たれどいよいよに音立てて降る末の松山

政庁へつづく大路はまぼろしか現代人の住居ひしめく

二冊のみ書籍を求む「和食展」始まらんとす博物館に

礎石いしづえと松の樹木の廃寺跡老いの扉を解き放ちたり

作品 A

磯田ひさ子

尖る

・森

天上に花は満つるかチューリップ逆さにしたるやうなともしび
ミル廻す音がときをり聞こえ来るガリゴリカリコリ心を叩く
いちじくのシフォンケーキを崩しつわが来し方の痛み薄るる
後の日々幾年ならむ変わりゆく浅草の地のただ中にて
わがための昼餉の菜に炒めるといはずにみどりのオクラのソテー
過ぎたるは及ばざること塩少し利き過ぎたれば味が尖る
夫の逝き一年余り母のこと思ひいたさず 彼岸花咲く

市原やよひ

金魚

・萬

玄關を逃れて避暑に來し金魚秋が来るまで仲良くしよう
この金魚掬いたる孫大学生夏の祭は遠くはるかに
一匹のみ残りて泳ぐ水槽に今日は水草一株足せり
水槽を一人占めしてゆうゆうと泳ぐ金魚と一人の我と
コンクリの上にて焚ける迎え火のひそやかなれど夫を待ちたり
小さくとも火を見つけつつ船り來よ皆と待ちたる我の元へと
新盆のあなたを迎え集いたるうから十人説経が包む

梅本武義

猛暑日

・羊

菜園に抱えし西瓜のその熱さ驚きながら持ち帰りたり
熱中症畑で死亡は同年齢とは言え我に楽しき菜園
柵補強猛暑日続く遅れにて猪侵入被害甚大
水風呂に猛暑日今日を振り返る老いが役立つ何をしたかと
尾の切れし蜥蜴が走る災難はわが家の敷地何にやられた
憎たらしき劇中人物俳優の演技力だと思いつつ憎し
「角をとれ」と言われし昭和遠き日よ河口近くの小石か今は

大浪美雪

糸口

・森

塀の角壊して逃げし者のゐてわからぬままに修理を頼む
重なる禍事ひとつ解ける時二つ目の糸口見ゆる気のせり
暑きまま夕べとなりぬ薄闇をかうもり二つ三つと飛び交ふ
秋去りぬ厳しき暑さそのままにをちこちよりぞ虫の声立つ
軒深きあづまやに座し体温と変らぬ風になぶられてをり
小さき雲一町四方に雨降らし暑さ増しゆく今日は処暑
皮つきのままに蒸したる唐黍は薄絹被く姫の如しよ

奥田陽子

ロシアを知らず

・羊

とりたてての思いなければ知らず過ぎしロシアの歴史知らんと今は
 〈広い広い土地持ちいるに他国の土地に踏み入るな〉と叫びし声を忘れず
 〈アラハの春〉押し潰したる戦車ありてそれよりは歌わぬロシア民謡
 ロシア民謡と記憶して来し「コサックの悲歌」今にして知るそはウクライナと
 抑圧をくぐり抜けきて高く立つ映像、文学、音楽うつくし
 芸術の大団と思いきたりしが核威嚇なす声を聞きおり
 文学も音楽をも排さんとぞされどわれロシアというを未だも知らず

小野雅子

夾竹桃

・羊

人気なき真昼の路に並び立つ夾竹桃にあかき花満つ
 道白くみどりに茂る夾竹桃 濃きくれなむを空へと伸ばす
 ちかつきて見ることはなし 齋き木に点れるやうな夾竹桃の花
 遠き日の少年たちの駆け出たす佐藤紅緑「夾竹桃の花咲けば」
 滝のやうに土の流れるテレビ画像 宮崎地震の恐ろしさ見る
 事務的な薬局の人がやさしい日何があつたか彼女にわたしに
 あの人はどうしてゐるか半透明の葛まんちゆうを皿にすべらす

神田鈴子

オリンピック

・大

逝きしとふ夫を語れる友の電話ことは途切るる低きその声
 五十代に夫を送りしわれよりも老いて別るる友をし思ふ
 オリンピックへ重ねし努力は報はれず顔を伏せたる背中がふるふ
 オリンピックのメダル奪取に沸き立つ日ガザには子らが逃げ惑ひたり
 オリンピックに沸く日も戦に死にゆける女子供の映像を見つ
 罪もなき幼き子らに救ひあれ爆破の画面に言葉うしなふ
 ウクライナに四人の家族を失ひし男の顔を衝くなり

上林節江

パリ五輪

・湾

何をしにここに来たかと腕きつつ限りをつくす選手のまぶし
 その気概大雪山のごとしよと槍なげ女子の反り身に見える
 ウクライナの国旗はためくフェンシング不屈と勇気まざまざと見る
 ダンスなの？自由にくるくる飛び跳ねて表現力を競うブレイキン？
 演技終えや々と笑顔にマシンから人間に切り替わったんだね
 参加することに意義がと唱えつつ「勝利の鐘」に規制あるとは
 男性か女性かと揉め提訴まで悩ましき世になつたね男爵

菊地栄子

梅酔

・海

ふた本の弦をふるわせ奏でいる馬頭琴奏者の横顔もよき
 若葉から青葉へうつり歳月は我を老いさせ樹木を深む
 ブランコに遊べる子等も帰りゆき静けさまとい夕暮れせまる
 葉の裏に隠れおせしも青虫の影映し出す朝の光は
 手拭いを上下に左右に押し出して足も踏み出す「北国の春」
 大方は目の前にある捜し物この頃多くなりしを見つむ
 晴れたる日今年は続きし影響か漬けたる梅の梅酔少なき

草刈十郎

水中花

・世

梅雨晴れ間水中花ひとつブランデーグラスにひそと咲きてゐるなり
 久々に聞く電話の友の声先づは互ひに健康確認
 昭和平成令和と生き継ぎあと幾年生かされゆくのかをりをり思ふ
 先刻の雷雨の去りて音ひとつなき静寂の朝となりたる
 幾十年前に購入扇風機昭和の風の吹きてくるやも
 丸洗ひしたき政治の続くなり梅雨の霖雨で垢流したき
 ウクライナ 子らの悲しみ見るテレビかき氷つつく平和な国の子ら

河野繁子 灯りを点す

・雁

さっきまで話しておりに面会より帰りに面会より帰らなく電話かかりし
さつき会いし面差しのまま名を呼べど応えなく冷えし両手を包む
喪の家に明かりを灯し次々とキツネノカミソリ猛暑日を咲く
病室に現金おけぬを淋しかりし洪沢栄一の新札供う
記念コイン買うためならん病室に銭欲しがりが心に残る
びりびりろろ鳶のなく空飛んでゆきお話しできるよ友ともなして
少しずつ気力もどれる我が仕事供花を切りつめ寿命をのばす

小林能子

パンダ

・羊

日中国交回復記念に贈られしパンダに日本中が沸きたつ
パンダ観にゆくのアジアの研修生 日直に告げ誇らしげなりき
第一步上野にしるしパンダにも逢ひて来日の夢に臨むと
お天王様の屋台の出会ひ縫ひぐるみのパンダが吾子の日々に寄りそふ
引越し転校かさねし吾子が掌に遊ばせるパンダの縫ひぐるみ「ポポ」
夏休み一緒にパンダ見たかつたと咳く母に子らは応へず
ペランダに送り火を焚く母と子の明日は今日よりもきつと良くなる

近藤栄昭 夢

・虹

蜘蛛糸垂れる糸先水滴の膨らみ止まり風に落ち行く
蝦夷の地の風が浸み込み黒い身に鱗つく皮身欠ニシンは
縁側の瘤となりたる栗かほちや冬至になれば瘤は消えゆく
人波が引きゆく駅前チャルダッシュウ寄せきて返す引きゆくリズム
室外機の熱風が枯らす植木鉢夏はまだ来ず蝉が鳴かない
「僕たちには夢があります」黒い顔高校野球開会宣言
髪毛が山をスライスする夜はチリチリ燃える星の釣り糸

近藤芳仙 音

・信

植糸をへし早苗とつぶりぬるるまで雨の音するこのすがしきや
植糸をへしばかりに親し茄子トマト末の熟れし実かんがみてをり
もろこしの芽生えの緑三センチ移植に目見ゆる長き白き根
追肥してさらに伸びたるもろこしの葉擦れの音をけふは聴くなり
日輪のここまで届き雨蛙 草生に背を光らせてをり
地にかがみ草引くときに聴きし音 ききやうが蕾はじくその音
ふくよかな白にふくらむ夏椿一日が一世地をも染めあぐ

坂上直美

夏の記憶

・天

ふるさとの町をさまよう夢を見き生まれし家にとどりつかざり
蚊帳ほろふあの海に似し夏の夜の不思議の世界往きて帰らず
野っ原のぼらというものありき子どもらは時を忘れてバツタ追いけり
わが鼻の記憶は野原の草いきれ耳の記憶はギースと鳴く声
ミチオシエあの日あのまま追いたればこの世界には知らざりしか
今もなお川の底いにわが魂のかけら残り京の清滝
信州の山に行きしも昔なり夢に出て来るキスゲのなだり

坂出裕子 桔梗

・洛

コロナ禍に閉ぢ込められてゐる夏の熱暑の刻を桔梗咲きをり
窓辺よりそつとのぞけば大丈夫ほら元氣よと桔梗ゆれをり
暑くても何ともないと言ふやうに揺れる桔梗に元氣いただく
秋は来る必ず来ると告げながら揺れる桔梗にこころ開かれ
いつまでも続く暑さでないからと励ましくるる庭で桔梗が
涼し気に窓辺に揺れるむらさきの桔梗に秋の涼をいただく
炎天の熱暑の庭に涼し気に咲くむらさきの桔梗うつつし

佐藤道子 迎へ火

・甲

森の中木立の下の迎へ火の樺の炎消らにゆらめく
亡き夫よ私と一緒に並びゐて盆のお客をお迎へしませう
一番に車に乗りて来し亡父よ草生の中にくつろぎいます
迎へ火に煙草の匂ひと息子が言ひぬ煙草の好きな姑来ませしか
この土地が大好きだつた亡義弟よ浅間山麓寛ぎいませ
おもてなしまめにしておし亡母なりき皆集まるを喜びませむ
盆提灯しまつて寂し山の雨雷鳴りて夜半降りつつく

篠原まり子 クーラーの風

・羊

水欲しく蛇口ひねればお湯が出る三十八度の気温が続く
ペランダの鉢植えなべて室内にせめても願うクーラーの風
友の訃報悲しみには非ずしてひとりつぶやく間もなく逢える
名優の死「太陽がいっぱい」なつかしみ今一度観る歳月はるか
「台風一過」言うは易しも刻々とひと夜さのこと思い遣ればや
眼の疲れこころの疲れひたひたとペンを握る手文字が悲しむ
枕辺に「風の坂道」添い眠るやさしい人に出逢えるために

柴田登志恵

空を翔ぶ

・天

赤鯉は毒持つ長き尾を曳きて海面のちかく空翔ぶ形
半登がほどの赤鯉街海へ近づくと朝夏日かがやく
街海の岸に寄り来る鯉の群れときをり錯の白ひるがへす
あさあけに海猫鳴きて金色に太陽燃ゆる地球沸騰
熊蟬はいのち極めて潮風あかるき木立に落ちぬ かそけし
海べりの音のなべてを包み込み鳴く松林しづかなりけり
内海の奥の水道に嶋あまた海原青く宙へとつつく

鈴木結志

盈月

・福

盈月の天の言伝乗せくるや燦々としてかがよいわたる
お指折り秋の七草数うるも憶良に習う詩のいしじと
書は師とも友ともおのがすこやかな限りにひらく花のごとしも
沈黙は賢者の美德当意即妙の意におのれを見つむ
一存の意気地健康体にして今日ある生きをふでに技練る
平和世に考えられぬ官憲の圧力に耐えし「転向文学」
ふでとりて万葉ゆかりに心染め意気の心念尊しとする

関根榮子

塩飴

・埼

わが地区の小さき公園の草取りに水のボトルと塩飴くぼる
暑すぎて蟬も鳴かない「本当に」語らい乍ら汗ぬぐいおり
この夏はわが大敵のあの蚊さえ常より少なくて思うこの頃
さらさらと光る編隊のB29見上げし幼日の夏よみがえる
幼日にいつ覚えしやその意味もわからぬままに歌いし軍歌
あこがれし西條八十の作詞せし軍歌と知りぬ戦後になりて
詩人ゆえの作詞の苦悩に思い馳す「若鷺の歌」や「同期の桜」

関根和美

種詩き

・埼

酷暑にも門辺のすすき穂に出でて季にしたがえり処暑なる朝に
はらはらと散る萩の花その小道風立てば自ずと吹き寄せられて
腰いため夫の農事はままならず机に蒔くべき種ならべおく
初心者のわれをほめつつ育てんと畑にありても教師なる夫
大根を今日は蒔きたり「にんじんは明日蒔けばよし」夫に声掛く
よくもまあ庇に穴あけ天井も落としたりこのアライグマ一家は
天下晴れひとを迎える日とならん地震台風とおのきていよ

高尾恭子

旅の歌

・大

田土成彦

昂

・宙

大井川の朽ちた橋板とびこえて浮世絵もどきの木橋をわたる
あてどなき旅の山路をしるがねの尾花はさやく新蕎麦する
聞き耳をたてているのか老犬をよけて峠の木の卓かこむ
谷わたる風は悲泣のひびきあり寝首かかれし背き武士
底のなき谷を見おろす吊り橋はぐらり異界の風に揺れたり
山に棲み山を追われた山祇は *the Goblins* に映っていない
秋日さす滝のしぶきにたつ虹の淡々として今日のとときめき

高津砂千子

うちわ

・平

田土才恵

石臼

・宙

スイッチョの声が迎えてくれる家二ヶ月ぶりのわが家の庭に
ゆうらりとカーテンゆれることさえも心やすらく退院をして
湯あがりに寝ころびうちわでおおきゆくこのこちよさわが宝物
あら草の繁る庭の面ちらり見て暑きひと日の終わりとなすも
入院の間にかびしふるさとは小学生のわれとわが姉
きのう今日なぜか頭がつながらぬことありそのうち忘れてしまふ
思いきり大地を踏みて歩みたしようやく玄關くぐりて思う

滝田靖子

A I

・新

玉井綾子

夏

・羊

左前腕熱傷と日記に書いてあるもう看護師ぢやないといふのに
左腕に火傷と書けばいいものをまだ看護師のつもりなのかよ
出口から三メートルでずぶ濡れの身体もう雨に挿けてしまへ
雨風をどう凌ぎしか葉の陰に二匹の黒き幼虫太る

「A Iに感情を学ばせています」A Iの学ぶ感情つて何だ
A IにしかわからないA Iの心がやがて歌を物にする
所在なく人待つときは手の中のスマホを本のやうに読んでる

銀河団超銀河団さらにそのひろがる先は言葉さへない
むつら星散開星団ブレアデス娘の乗る車のマークに親し
十余年かけて飛びあるボイジャーがやうやく抜ける太陽圏を
オールトの雲とかカイパーベルトとか知ればそれなりの楽しさの湧く
天の川は佐渡に向かつてかからぬと理屈は脳の片隅に置く
シリウスからシリウス星人が来るといふ過去と未来をこちや混ぜにして
天狼は青く燃えつつこの星に住む科おほきわれらを視つむ

いちじくのじーんと匂う木下影亡父の面影ふつふつと湧く
二人して鉢に育てるピーマンの星形白き花慈しむ
今夜見しヤマリの右足傷持てはこころに一所陰りをなせる
透けて見る足の吸盤機能せず今宵も虫を捕らえんとすれど
大声に歌えば暗れてゆくものか今宵も通うコーラスへの道
庭隅に置かれし石臼米搗きの役目果たして来しと夫いう
大玉の花火上がれる中空に夜間飛行の一機過ぎゆく

帰宅時の潤んだ道で聞こえる虫の鳴き声写メには撮れぬ
夏の夜の地元の駅は涼しくて道の随所に香るゲオスミン
同僚や家族・テレビが話す中、吾だけ知らない昨日の雷雨
蓼科の夕立の後を東京の雷雨の後に思い出さない
すべすべの幹から分かるサルスベリ夏は鮮花で百日紅と知る
駅までの道順は色 町内のとりどりの百日紅渡り行く
熱中症アラート次いで台風の来る夏休みは部活少なし

永田 進一 夏草 ・山

夏草の繁りゆくさま太陽を受けてぐんぐん伸びるさまし
思い出のアラン・ドロンよ過ぎし日の「太陽がいっぱい」わが青春語
君逝きて六年を経ぬ背表紙に石垣りん詩集と遺影近くにありぬ
終戦より79年の追悼式戦後生まれが47%とう
七月の平均気温は26度超え史上最高とう地球沸騰
暫くはしばしの間 さりながら歌舞伎十八番團十郎の出番なり
風鈴の音色涼しき昼下がり泥鰌を食みし浅草土蔵

水塚 節子 雲 ・銀

立ち止まりまた流れゆく秋の雲検査結果を待つ間ひととき
雲は流れ樹の葉ざわめき方形の窓の外は区切るものなし
まざまざと因果応報見せつける検査結果の数字の羅列
炎天下耐えに耐えしも花なべて水を欲りつつ枯れ果てにけり
炎天下バス待つ間のしばらくを慰めくるるふうせんかずら
時は江戸小田原藩に仕えたる秋暉の花鳥画紙面色どる
友おらばすくにも行くと言いたるを遠くなりたり千葉の美術館

仲西 正子 日草 ・沖

いつのまに芽吹き咲き継ぐ日草の気楽なことよ庭の日溜まり
葦太き日草ありこの庭の元祖なりせば支柱たてやる
真太陽を浴ぶれどその実は白くなる南国ゴーヤー何に接がれし
少女子の紅のほほえみ日草よ季を選ばず庭を彩る
天折の姪の葬送その朝あーあーと母鴨なく
十二なる娘をおきて逝きたれば棺の姪の唇を読む
あかあかと仏桑花咲く真夏日の姪の葬儀の路次のしずけさ

中村 博子 桓武天皇 ・池

七月は観測史上最高の猛暑日つづく異常気象とぞ
森の風入りくる午前一時すぎ音なき宇宙ただに広がる
タンパク質、糖への過熱に茶の色へ変身するをメイラード反応
いつしかに講演聴きしかの著者の「桓武天皇と平安京」求む
ただ一度出会いままの道子さん三十年振り電話に弾む
秋になり桃山近くで会わんと約東交わす道子さんとの
ご無沙汰の桓武御陵へ参拝し蝉鳴き立つる参道もどる

西堤 啓子 アンタレス ・天

アンタレス・シリウス・カペラ・ホルックス そら哀しみはテーマのひとつ
こしらえた話に抱ってたつ人は願志に灼かれ疲れて眠る
十年をつまずきながら登りきて視界良好 美ヶ原
上書きの記憶の中に住む私 最低うそつき人でなしである
明るむと投げたことばを撃ち落とす人は魔窟に暮らしています
尾を振るは怒りのしるし猫の場合 スウィッチの音私の場合
怒りのスウィッチほとんど入らなくなった修行のような十年

浜谷 久子 早る ・地

紫藤と茄子早りの夏を共生の葉を茂らせて蔭つくり合う
水運び限りのあれば水遣りの優先順位をつけるほかなく
苗植えの春は希望にあふれて酷暑早りの夏を思わず
ひ孫蔓延びていちこの親株の黒く乾いて土へと還る
ジンジャーの葉っぱの強靱水運びわが手を支えて根株を踏ん張る
草猛る空き地を這い出る葛の蔓酷暑の昼は葉を立て凌ぐ
花オクラ開花の早朝ふうわりと袋を門扉にかけてゆく人

檜垣美保子 風

・昂

ゆうがおの花うなだれて終わる朝発熱告ぐる少年の声
 カリウムの数値高しと言う医師にそうですかとのみ返すわが声
 三か月行方不明の雨傘が折り目そろえてたたまれており
 かすかなる風の触るるや道端にあおむけの蜘蛛ジジと鳴きたり
 風あるとみえねど昼の鶴見橋東から西へ羽毛渡りぬ
 「さいこの」をかさねて最期むかえたりよこたわる母の髪洗いし日
 額装にのこるさいこの母の息「九頭竜川」の執念の墨

福田庸子 白蝶

・今

アウトバーン百四十キロのスピードに慣るる眼は麦畑を追ふ
 乾燥と寒さ乗り越え畑に舞ふ白蝶のみを見届けし午後
 家裏の苺の実り小さくも一年分のジャムとなしゆく
 遅き宵すれ合ふ膝のぬくもりはフランクフルトのトラムトレイン
 地震なき大陸なれば教会の石組みに極むステンドグラス
 教会のステンドグラスの中央のバッハの顔に見おろされつつ
 ライプツィヒを拠点の楽団はアンコールを五回も叶へし市民の為に

藤田美智子

うろこ雲

・新

宣告されしよりも五か月早き死を受け入れてるむ閉ぢし眼は
 見舞ふべき人もうをらず道ばたに落ちたる柿の背き実を蹴る
 ありありと姿見ゆるにすでに亡くうろこ雲ただ広がるばかり
 暮れ方の光る川面を見るときにわれには明日があると思へり
 〈大人は誰もわかってくれない〉われもその大人のひとり今さらながら
 教室で授業を受けるのがあたり前少女はあたり前の外をさまよふ
 鬼になるつもりもなく呼んでる逃げ回りつつ〈手の鳴る方へ〉

藤森巳行 今年の盆

・銀

伸びしろはまだまだあると我が胸に言ひ聞かせつつ今日も歌詠む
 精霊を背負ひて墓より戻りたり先祖と過すふる里の盆
 盆棚に先祖の位牌飾りたり年に一度の我との出会ひ
 亡き友と幼き日日を語りつつ今年の盆は過ぎてゆくなり
 我が生命三世に渡る旅なりき生死涅槃の海をこえゆく
 台風の進路予想図睨みをり我が家はアンダーパスのすぐ脇
 大雨の心配しつつ四十九年我が住む家はガード脇なり

船田清子 暗天

・天

山頂にはいくつかの果もあるならむ日の暮れ時を恋ほしげに鳴き
 日の暮れにテッペンカケタカの一声を残して去れり生駒の方へ
 ノッタリと雲の広がる空に向き両手合はせて雨乞ひをする
 盃盞盆の中日にして空仰ぎ君やいつこと声かけてみる
 病室の白天井へ窓の外の空の背さがしのび込みる
 七、八月に雨の降りしは一夜のみくつすり寝込みて降雨を知らず
 まなかなる近畿ばかりがすつば抜け晴天統きの夏日をあふる

本元由美子

今生を数ふ

・岡

村上の「海の向こうで戦争が……」現実となり未だ終はらず
 映像の大海原の戦艦に激突せんとする少年の笑顔
 映の田に稲穂のすでに出でたれど今年の作を憂ふる農家
 農夫らは口々に言ふ米の値を 値上がりすれどなほ辛き農
 なにゆゑにスーパ一の米は品不足離れ住む子にけふもまた送る
 わが家にも耕作放棄の荒田あり今日も「シルバー」に頼む草刈り
 今日もまた夫と二人の田圃道ウォークしつつ今生を数ふ

絶え間なく清滝川の瀬の音のひびきてみどりの葉を揺らしたり
清滝の里の大きく曲がる道屋をしづかに立葵咲く
道脇に赤きポストが立ちあたりなつかしきかな古きかたちの

清滝の里のしづけ道脇の百日紅の花揺るるともなし
槭葉あかへの小さきが揺るる影を踏み屋さがりの徑上りゆきけり

深川の淀みを泳ぐ子らのこゑくませみの鳴く声と重なる
巨き岩にのぼりて冷えし身を干せる裸の子らのこゑがひびき来

松 浦 禎 子

ふるさと思うよすがの真人山まことはずみゆく手のはるかに浮かぶ
わたくしのふるさと増田の満福寺いわれの今日は正門に入る
亡き姉の若き日恋せし源州坊本堂の障子にふとも影なす

漆塗りの厠はひそと家の奥本家のおがさん亡くて五十年
内蔵へ続く廊下の天窓より今日のわたしに注ぐものあり
熱中症おそれこの夏家居して高校野球のラジオを友に

小松亮太のバンドネオンを気を長くしてききいたり夜の更けるまで

松 本 多 摩 子

せとうちの焼きあなご入りちらし寿司母の味という娘の笑顔
遠く住む孫の成長声変り親族揃いちらし寿司うまし

今どきのままごとあそびベイベイでポイントつけて袋を買いいぬ
亡夫生れし島へと向かうフェリーは孫の観光便乗の旅
母のもと盆に集いし兄弟は一日釣りして海に遊べり

院生を決めたる孫との二人旅未来の話これまでのこと
相続に亡夫の出生連るとき吾には知らぬ歴史のありぬ

三 浦 好 博

出征の兵士にあらず金メダル取れずもお国に帰れるのだよ
大輪のアメリカ芙蓉の花群れが真夏の風を休ませてゐる
バラサイトに暴力ああその父の「死んで呉れたらどんなに良いか」

穴のあくバケツに水を注ぐ事に折れたる友にもつと愛をとや
君の庭のカラーの花を過ぎてゆく光と影を見てゐる我は
選択的夫婦別姓今もなほ「寅に翼」ゆ七十年も

付度かメディアアジャックか総裁選あまた洗脳されゆく我ら

宮 本 靖 彦

盆の日に派本の墓を子と洗ふ石すべすべと吾を迎ふる
ギイと鳴る椅子も古びて我が部屋に飾る写真も半ば逝きたり
百日紅家ごと咲くを散歩せり桃色濃淡あるを染しみ

老松の巖たる軒にれいしの葉巻きつきいほ背き実を下ぐ
山行の先達務めし友は今果たての宙の案内人かも
西空に白雲の峯もくもくと明日は十号当地お見えか

覚悟して待ちし台風十号は大圏のおかけ事なく過ぎぬ

三 好 聖 三

コスモスの《林》を抜けて採りにゆくオクラあるいは御婦人の指
わが背丈らくらく超えし向日葵の百花おのおの東にひらく
草刈りのあいまあいまの小休止樹木が落とす影をたよりに

千の本手紙を交えて捨てにゆくゴミピットへと投げ入れにゆく
アジェのバリバリの衝風に迷い込む植田正治の《風》に惹かれて
遊歩者・売春・賭博・無為・倦怠まずは付箋を貼り付けておく

生前のおもかけの無き死に顔をひとり見ているしみじみと見る

御代田澄江

お盆玉

・茨

夫の霊祀る祖霊祭と暮參とを夫婦で済ませ息子ら來たる娘らも婿と孫も來て一時七人亡夫の仏前一日賑はふ

「ハイみいちゃん、お盆玉だよ」息子より孫へ波沢栄一渡る子は用意なせしか吾もと諭吉あげ波沢もらひ交換なせり

二重虹海端ゆ出で山陰へ下虹鮮やか上虹薄れ

前の道通れる男子バラソルのまた一人ゆく令和の風景

零余子飯炊きて給へり八月十五日戰中戦後の暮らしを偲び

茂木 斌

百日紅並木

・埼

館林クイーンズ通り夏されば百日紅の並木見つつ行く

アクセルをゆるめて走る百日紅のみことな並木に妻の声あく

この夏の暑さに祭りも前倒し相馬野馬追ひ馬にもやさしく

新一万円札いつになつたら会へるやら九月に入るもわれに回らず

校庭の運動会のリハール明日が本番青空となれ

入院の四十日を単行本一冊手にしベッドの友とす

令和五年ベッドに歳を越すまいと数日残し退院をせり

もとむらしげと

船長ばばりょうこ

・そ

人への愛歌への愛を満杯に漕ぎいだしたり地中海へと

街角で拾いて舟に乗せてゆくそれいゆ号はノアの方舟

歌の国へ誘われゆく愉快あり船長の舵に身を委ねつつ

歌あれば虚しき世にも耐えゆかむ華奢な体に溢れるパワー

関幸田池の畔に建てし歌碑一基友一先生を偲ぶよすがに

敏しき批評意図して言いし行間に溢れる優しさ参む歌会

洒落心つね失わずりょうこ師の身なりも言葉もエスプリに富む

桃原佳子

猛暑

・沖

炊き上がるメロディ音は午前六時干物を焼けば匂い溢るる

今日も猛暑うんざりしつ空仰ぐ雲は解けて透き通っている

コスモスは開けど飛び来る蝶はなくビーマンは緑の萎ゆる

西空に掲がる火花は低く見え光が風に押されて流る

窓を開け扇風機回し眠る夜に風よ私を銀河へ運べ

台風のととの浜戸川どうとうと濁水流れ草木を運ぶ

稲田すでに出穂間近き八月尽暑さいまだに敏しかれども

山下雅子

見えぬ幸あり

・習

ねぎしょうがみょうがの香りはほんのりとただよう夕べ見えぬ幸あり

別れゆきしTさん名残りのねじ花の一面に揺る気ままに揺るる

越しゆきしSさんに戴くコルチカムサフランとなる染しみのあり

ベルト状の緑耀う道をゆく爛漫のつつじしのびながらに

老夫婦二人マンションに住むというめぐりの人も老いてゆくなり

葉がくれに白きが一りん安羅の樹に夫妻をしのぶ貴なりし人を

伸び上がりつとも崩るる噴水の緑り返しいよよ踏ん切りつかぬ

山野幸司

馬

・沖

大陸へ馬が百万門司港に別れを惜しむ蹄鉄の音

馬の眼の深く潤みし船上に輻重兵君涙を流す

輻重兵馬の心を掴もうと体を摩るその内側さえも

さようなら心の内で叫んでた別れのベルが停車場に鳴る

陽が斜め田んぼに差せる土用の日ばやと陽炎大地に湧けり

沈黙の長く続きし間なお広がり続く雲に連なる

沈みゆく夕日は速き田に残り一人の息を唯深くする

山本 孟

様々な感覚

・大

動あそぶきタトゥーの飾る肌きらひ力士の肌の「自然」を愛す
口当つる薄手の磁器は金の縁 厚手の陶器のコーヒー旨し
ひげ剃りし翌日伸ぶる内からの力たのもし短歌も出でくる
亡き人に倚りかかられず生くる者同士の団樂の声あたたかし
リンゴの歌聞けばむらむら湧きくるはわが家の戦後のまつしき生活
来るはずの人を待つ身の気の重きコーヒー重ねて飲み干しるたり
バスを待つ炎天のもと熱き地に急ぐ黒蟻の道草見飽きず

養学登志子

おさななじみ

・凌

ちゃんちゃんこコベットのあのポケットよ うんこベットのね三歳の会話
かわるがわるぶらんこを押す二十すつ十八の抜けるわたしの教には
飴玉が飲んでしもうたもう死ぬと一年生は大泣きに泣く
熟れ頃の苺を食べに山の畑洗わなかつたあの頃の苺は
桃をかじりほろと抜けたる下の歯は何度も放る屋根より落ちて
羊歯茎に茸を通し山くだるとどこかに抜けて落として来しも
どないして大都会なんぞこの老いであんた帰って会いたいよせひに

横田敏子

夏(一)

・福

雪、雪、雪、雪、雪、雪、と詠われし歌の恋しき今年の夏は
暑いねと言いつ分だけ暑くなるアイスクリーム溶け出す暑さ
昨日今日つぼみふくらむ秋明菊まるで暑さを楽しむように
ガラス戸と網戸の間にもがきいし蜂は熱さに息絶えにけり
大型の台風七号通り過ぎ秋めき立ちし空澄み渡る
エアコンを止めてタイマーセットして扇風機をON 今宵の夢は？
オリンピックと高校野球閉幕し次期総裁の火蓋の切らる

久我田鶴子

身じろぎ

・羊

北の地に身じろぐひとの気配してもういいからと言ふのであつた
言の葉はことばどほりにそよがない妹へゐるもの重くひそめて
戦争の落とし子なりしか戦地より廻りし父に馴染めざるまま
伝へたき思ひ束ねて送りくる北の便りはベッドの上より
沈黙の父の軍歴ほぐしつづ思ひ当たりしことも書きくる
一生を振り返るとき見えこしは憎しみならず恋しさならむ
(デラシネ)は昭和の響き ぼろぼろの無援の旗を風がなぶれる

